

書評

宮岡 等, 内山登紀夫 著

大人の発達障害って そういうことだったのか

黒木俊秀

本書は、2013年5月に福岡市にて開催された第109回日本精神神経学会学術総会に出店していたすべての書店で最も売れ、ついには完売御礼となった一冊であるという。確かに、このタイトルなら思わず手に取り、この2人の対談なら興味をそそられ、この章立てと構成なら心を動かされ、この装丁と価格なら即購入したいと思うだろう。それほどよくできた対談集である。

宮岡等氏によれば、この対談は、「大人の精神科医の視点で、一般精神科医が理解し実践できる『大人の発達障害精神医学』を、発達障害の専門家から聞き出し、接点、共通点、相違点を探ろうとする試み」であり、「日本ではどこか壁のある大人の精神科医と子どもの精神科医をつなぎたい」と願った企画であるという。なるほど、本書は、2人の共著ではなく、対談だからこそ成功しているのかも知れない。というのも、「大人の発達障害精神医学」は、今日、なお新興の未開の領域であるからだ。

それゆえ、宮岡氏は、大人の精神科医として本音の疑問を、発達障害、特に自閉症スペクトラムの子どもの精神科医である内山登紀夫氏にぶつける。たとえば、統合失調症の幻聴と発達障害の特性である聴覚過敏をいかに見分けるかという問いに対して、内山氏は「『この人は普通とちょっと違うぞ』と感じたときに、発達障害を念頭に置いて考えればよい」と答えるが、宮岡氏は「非常に曖昧ですね」と満足せず、より具体的に聞き出そうとする。そこで内山氏は「幻聴が非常に一過性であったり、切迫感がなかったり、状況依存的であったり(中略)本人の興味や関心と非常に密接に関係している」と詳述するという具合である。こうした対話のなかから、「コンビニのおにぎりは食べるけど、お母さんの手作り

おにぎりは食べられない(注：前者は塩分が一定だから)」、「深読みは禁物。本当はアスペルガーとボーダーの判別はしやすい」、「拒食症とASDの合併は昔のシゾイド的な人に多い」、「女性はノーマルに振る舞うのが上手」等々、注目のポイントが列挙される。その結果、2人は「大人の発達障害は大人の精神科医が診るべき」とし、その「診断や対応には、大人でみられる一般的な精神疾患を適切に理解し、症状をきちんと評価できることが大切である」という至極まっとうな結論に達する。本書を通して大人の発達障害を大づかみできた読者には、続いて、内山氏も執筆している『成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル』[神尾陽子(編), 医学書院]に読み進むことを薦めたい。

ところで、評者は、2人の対談をどこか懐かしく感じながら、楽しんだ。昔の医局では、こんなふうに先輩や同僚と率直に対話し、その耳学問により、精神科臨床のエッセンスを学んでいったものである。こうした古き良き臨床教育の味が今日のマニュアルやガイドライン重視の研修では失われつつあることを惜しむ。宮岡氏には、ぜひ本書のような「○○○○ってそういうことだったのか」をシリーズ化して欲しい。空欄には何が入るだろうか。新型うつ病、抗認知症薬、早期精神病等々、今日、臨床医が知りたいが、教科書に答えが載っていない疑問はとて多い。

(九州大学大学院人間環境学研究院教授・実践臨床心理学)

●A5 272頁 2013 定価：本体2,800円＋税
医学書院